毎日新聞 佐世保版　平成19年1月22日(月)

西海評論

問いを深める

大学入試センター試験が21日、終わった。受験生たちは答え合わせをしながら一喜一憂していることだろう。

一方、試験初日の20日、佐世保市のレストランでは、佐世保高専が市民を対象に企画した一般教養講座「哲学カフェ」が開かれ、答えが一つではない問いをめぐって参加者が活発な議論を交わした。

進行役を務めた一般科目哲学科助教授の川瀬雅也さん(38)によると、哲学カフェはフランスで始まった。お茶を飲みながら、肩ひじを張らず、専門用語を使わずに哲学的なテーマを語り合う試みだ。

「明瞭な答えを出すことではなく、複数の人の見方を知り、考える場を提供することが目的」という。

参加者は10～70代の女性16人と男性5人。開催を知って関心を持ったり、知人に誘われたりして集まった。テーマは「内と外とはどういうことか?」。

70歳の男性が口火を切った。「『いじめ問題を社会が何とかしないといけない』という発言が多いが、社会を自分の『外』にあるものと思っているのではないか。自分が社会の一員だという認識がない」。58歳の女性は「欧米と違い日本では、『社会』は『世間』に近い。世間には自分が入っていない。自分に都合が悪くなると日本人は世間に逃げ込みがちになる」と指摘した。

「自分の子どもは『内』ですか、『外』ですか?」と19歳の女性が問いかけると、34歳の女性は「『外』と考えている。自分の価値観を押しつけない育て方をすることが愛情と思う」と答えた。

議論は紹介しきれないが、笑いを交えながら2時間余があっという間に過ぎた。73歳の女性は「いつもは雑事に走り回って考えないようなことを考える時間を持たせてもらった」と感想を述べた。

カフェの開催は一昨年10月に続いて2回目。次回は近く長崎市で開かれる予定だ。「哲学の営みは、『答えを求める』ことではなく『問いを深める』ことにある。実利追求に偏り過ぎている世の中だからこそ、社会生活、人間関係などの根本にかかわる問題について、じっくりと考え直してみることは役に立つ」と川瀬さんは言う。

「家族とは何か」「政治や企業は何のためにあるのか」……。そう思わずにはいられない出来事が次々と起こる。問いを深めていけば、正解は出せなくても、正解に近づくことはできるはずだ。

佐世保支局長
小野英行